

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02110

研究課題名（和文）調査票調査におけるセンシティブな質問への回答に対する調査員の影響の計量的研究

研究課題名（英文）A quantitative study of the effect of interviewers on responses to sensitive questions in interviewer-administered questionnaire surveys

研究代表者

小林 大祐（Kobayashi, Daisuke）

金沢大学・人文学系・教授

研究者番号：40374871

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：個別面接法調査において、面接調査員が回答内容に与える影響を定量的に把握することで、より質の高いデータを収集するための方法的改善に貢献することを目的とする。この目的のために、調査員データを紐付け可能な全国規模の無作為標本による個別面接法調査データを整備し、その分析を行ってきた。その結果、調査員の性別が男性回答者の回答傾向に、一定の影響を与えている可能性が示された。これらの知見などについて、研究期間の4年間で、学術書への分担執筆を2本、日本社会学会大会での成果報告を5本行ってきた。そして、そこのコメントも踏まえて、海外の学術誌に査読論文として掲載されることを目指し、論文執筆を行っている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

男性回答者は男性調査員を前にした時に、地域社会とのつながりに関連する質問に対して、自身のつながりをより強く回答する傾向がみられ、この傾向は他の調査員レベルの変数や回答者レベルの変数をコントロールしても有意なものであることが確認された。さらに、女性回答者についても男性調査員を前にした時に、日本の経済についてDKNAを回答する傾向もみられた。既存研究では、調査員の性別の効果がみられるのは、ジェンダーに関連する質問に限られるとされていた。したがって、ジェンダーとは必ずしも関連しない質問において、調査員の性別の影響を見出した本研究の知見には学術的に重要な意義があると考えている。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to contribute to methodological improvements for the collection of higher quality data in interviewer-administered surveys by understanding the impact of interviewers on the content of the responses. For this purpose, a nationwide random sampling survey data of interviewer-administered mode to which researcher data can be linked have been analyzed. In particular, the analysis of the nationwide random sampling survey data, which was also conducted in self-administered mode in parallel with the interviewer-administered survey, indicated the possibility that the gender of the interviewers had a certain influence on the tendency of male respondents' responses. During the research period, we have written two articles on these findings in academic books and presented five academic conference presentations. Now, we are writing an article to publish a peer-reviewed paper in an overseas academic journal.

研究分野：社会学

キーワード：調査員効果 センシティブ質問 モード比較 調査方法論

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

量的な調査票調査のなかでも個別面接法(訪問面接法)は、面接調査員の存在によって、コスト面では不利ながらも、調査データの質を担保するとされている。しかし、調査員の存在は調査データの質にプラスに働くばかりではない。調査員の存在が回答内容に影響することもまた指摘されている。なかでも、政治や犯罪や性に関するなどのセンシティブな内容の質問項目では、社会的に望ましくない行為や意見が過小に報告され、社会的に望ましい行為や意見が過大に報告される傾向、いわゆる「社会的望ましさ」バイアスが、調査員の存在によって強まることが知られている。本研究代表者である小林も、特に階層帰属意識に焦点を当てて、自記式調査と他記式調査の比較を行っており、階層帰属意識の回答が自記式調査に比べて他記式調査で高くなるのは、調査員の存在に起因する偏りが生じているためであることを明らかにしてきた(小林 2015; 歸山・小林・平沢 2015)。

ただ、調査員の存在によって生じうる回答内容への影響は、必ずしも均質に作用するものではない。調査員の側の差異に注目することも必要である。この点で重要なのが「目に見える調査員の特徴」(interviewers' observable traits)の影響に注目した研究である。既存研究においては調査員の人種や年齢そして性別が、それらの特徴に関わる質問の回答傾向に影響することが報告されている(調査員の性別に関しては、Kane and Macaulay 1993; Huddy et al.1997 など)。

ただし、調査員の属性間で回答内容に差が観察されたとしても、意識変数ではそのどれが「真の値」に近く、どれが偏りの生じた結果なのかは、多くの場合なんらかの理論仮説に基づいた解釈によって推測されるよりなかった。例えば、男性調査員よりも女性調査員に対して男女平等をより肯定する傾向が見られた場合、女性を前にして男女平等を否定しにくいいため肯定的な方向に回答の偏りが生じると解釈され、男性調査員に対する回答の方がより「真の値」に近いと見なされるのである。しかし、当然ながらこのような解釈には常にアドホックとの批判がつきまどってきた。

調査員の違いが回答内容に影響する可能性があるのだろうか。そして、何らかの調査員の特徴によって回答に偏りが生じているということアドホックではない方法で説明することはできるのだろうか。これらの問いが本研究の背景である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は「1. 研究開始当初の背景」で提示された問いに対して、個別面接法と留置法を併用したデータセットを用いて取り組み、調査員のいかなる特徴がどのような質問内容で、どのような属性を持った回答者に対して影響を持つのか明らかにすること、そして得られた知見に基づき個別面接法においてより質の高いデータを得るための方法論的研究に貢献することである。具体的には、調査員が「男性」、調査員が「女性」、調査員が「いない」という3パターンの比較が可能になるデータセットを用いることで、調査員の影響がない場合を基準として、調査員の性別の影響をより適切に捉えることを目指す。自記式と他記式という調査モードの比較に加え、他記式モードにおける調査員属性データも利用可能な無作為抽出全国調査は、大変めずらしく、そのようなデータセットを用いた調査員効果の検証の試みは、管見の限り海外にも存在しておらず、本研究の最大の学術的独自性と言いうるだろう。

### 3. 研究の方法

統計数理研究所が2012年に実施した「国民性に関する意識動向2012年度調査」を用いた。10年以上前に実施された、この調査を用いる理由は、先述の通り、この調査が面接と留置の2つの調査モードで実施されていて、しかも面接調査について、調査員情報を利用することが可能なためである。従来の研究では、調査員の性別によって回答傾向に差があっても、男女のどちらへの回答がより偏っているかは判断が付かず、より「社会的に望ましくない」回答が顕著に観測されるものが、より偏りが少ないという前提で解釈を行うよりなかった。この点、本研究で用いる調査データでは、自記式モード、すなわち調査員が介在しない場合の回答傾向と比較することができ、この回答傾向をベンチマークとすることで、男性調査員であることが回答内容に影響したのか、女性調査員であることが回答内容に影響したのか、より説得力のある解釈を行うことが可能となるのである。したがって、このデータセットを用い、個別面接法調査の男性調査員が面接を行ったサンプル、女性調査員が面接を行ったサンプル、そして留置調査のサンプルとの比較を行った。

#### 4. 研究成果

調査員の性別が回答内容に与える主効果および、調査員の性別と回答者の性別の組み合わせの効果によって回答内容が影響されるか分析を行った。その結果、男性回答者は男性調査員を前にした時に、地域社会とのつながりに関連する質問に対して、自身のつながりをより強く回答する傾向がみられた。図1は、地域社会とのつながりに関連する質問の中でも「近所の人とのつきあいの程度」について、回答者男女別、個別面接法調査員男女別および留置法ごとに分布を示したものである。男性回答者が個別面接法調査において、男性調査員に回答した場合に、「挨拶をかわす程度の顔見知りがある」と回答する割合は、女性調査員に回答する場合よりも小さくなっている。一方「何かにつけ相談したり助け合ったりするような、深いつきあいの人がいる」の割合は大きくなっている。「留置」からも乖離していることから、男性回答者が男性調査員を前にした時に回答に偏りが生じている可能性が示唆される。



図1 回答者男女別、個別面接法調査員男女別および留置法の「近所の人とのつきあいの程度」の分布

これらの傾向について、調査員レベルの変数と回答者レベルの変数を投入した、hierarchical generalized linear model (HGLM)を用い(Hox 1994) さらに検証を行った。その結果、この傾向は他の調査員レベルの変数や回答者レベルの変数をコントロールしても有意なものであることが確認された。さらに、女性回答者についても男性調査員を前にした時に、日本の経済についてDKNAを回答する傾向もみられた。既存研究では、調査員の性別の効果がみられるのは、ジェンダーに関連する質問に限られるとされていた。したがって、ジェンダーとは必ずしも関連しない質問において、調査員の性別の影響を見出した本研究の知見には学術的に重要な意義がある。

#### 文献

- Huddy, Leonie et al., 1997, The effect of interviewer gender on the survey response, *Political Behavior* 19(3) : 197 -220.
- 歸山垂紀, 小林大祐, 平沢和司, 2015, 「コンピュータ支援調査におけるモード効果の検証: 実験的デザインにもとづく PAPI, CAPI, CASI の比較」『理論と方法』30(2): 273-292.
- Kane E.W. and Macaulay L.J., 1993, Interviewer gender and gender attitudes, *Public Opinion Quarterly* 57(1) : 1-28.
- 小林大祐, 2015, 「階層帰属意識における調査員効果について: 個別面接法と郵送法の比較から」『社会学評論』66(1):19-38.
- Hox, J. J. 1994, Hierarchical Regression Models for Interviewer and Respondent Effects, *Sociological Methods & Research* 22(3): 300-318.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 真鍋一史・前田忠彦・清水香基	4. 巻 137号
2. 論文標題 国際比較 / 文化比較調査における測定の等価性 / 不変性の研究 : 多集団確証的因子分析 (MGCFA) を中心として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林大祐	4. 巻 72(6)
2. 論文標題 不安定就労期間が抑うつ傾向に及ぼす影響の男女差についての実証的検討 : 「離職理由」を考慮した分析から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 149-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14988/00027961	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 前田忠彦	4. 巻 26
2. 論文標題 コロナ禍にあっても揺るがないこと	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会と調査	6. 最初と最後の頁 110-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小林 大祐・前田 忠彦
2. 発表標題 個別面接調査における調査員の観察可能な属性が回答に与える影響 : 自記式調査との比較による検討
3. 学会等名 日本社会学会 第95回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林 大祐・前田 忠彦
2. 発表標題 調査員が回答内容に与える影響の自記式モードとの比較による検討
3. 学会等名 日本社会学会 第94回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 前田忠彦
2. 発表標題 訪問面接調査における地点特性と調査員特性が回収状況に与える影響
3. 学会等名 第71回数理社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 前田忠彦
2. 発表標題 「社会的価値観は変わるか」再考 日本人の国民性調査を用いた検討
3. 学会等名 第72回数理社会学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林大祐
2. 発表標題 複合モード・ウェブ調査による方法論的 比較(4)：ウェブ調査におけるセンシティブな内容の質問の方法の検討
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 前田忠彦
2. 発表標題 継続社会調査におけるあいまい・中間回答の増加について
3. 学会等名 第70回数理社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林大祐・前田忠彦・吉川徹
2. 発表標題 SSP2022調査の実査過程と回収状況について：WEBモードによる無作為抽出全国調査の試み
3. 学会等名 第96回日本社会学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 歸山亜紀・小林大祐
2. 発表標題 確率的オンラインパネル構築の試み（2）：パネル登録受諾者および郵送モード希望者の分析
3. 学会等名 第96回日本社会学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 前田忠彦・小林大祐・石橋拳
2. 発表標題 確率標本へのウェブ調査におけるサティスファイス行動に関する分析：SSP2022 調査を事例として
3. 学会等名 第76回数理社会学会大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 渡邊勉, 吉川徹, 佐藤嘉倫編著(その他の分担執筆者, 長松奈美江, 山本耕平, 吉田崇, 古田和久, 森山智彦, 石田賢示, 金澤悠介, 田辺俊介, 大槻茂実, 小林大祐, 石田淳【小林は第13章を分担執筆】)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 260
3. 書名 少子高齢社会の階層構造2 人生中期の階層構造(小林執筆箇所は第13章「『就職氷河期世代』の格差意識」)	

1. 著者名 杉野 勇、平沢 和司、歸山 亜紀、小林 大祐、轟 亮、尾嶋 史章	4. 発行年 2024年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 210
3. 書名 無作為抽出ウェブ調査の挑戦(小林執筆箇所は第3章「リスト実験によるセンシティブな内容の質問の試み: ネットにおける在日韓国・朝鮮人についての否定的な書き込み経験率の推定」)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	前田 忠彦	統計数理研究所・データ科学研究系・准教授	
	(Maeda Tadahiko)		
	(10247257)	(62603)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------